党はさまざまな色合を含む

決議が、党内における思想的潮流としてのボリシェヴィズムから一線を画する必要があると考えている最後通牒主義は、ちがった種類の現象である。この最後通牒主義――それは、疑いもなく現に存在しているが――は、国会議員団を対象とする党とその中央諸機関の長期の活動を排除し、第三国会があたえる豊富な煽動材料をたくみに利用するという意味での、労働者のあいだの長期にわたる、辛抱づよい党活動を排除する。この最後通牒主義は、国会議員団を対象とする党の**積極的、創造的**な活動を排除する。こういう最後通牒主義の唯一の道具は**最後通牒**であり、それを党は、ダモクレスの剣のように、自党の国会議員団の頭上につるしておかなければならず、またそれは、ロシア社会民主労働党にとっては、西ヨーロッパの社会民主党が長期にわたる、ねばりづよい**習得**によって蓄積した、議会政治の真に革命的な利用の経験のすべてにとってかわるべきものなのである。**この種の**最後通牒主義と召還主義とのあいだに一線を画することは、不可能である。両者は、**冒険主義**という共通の精神によって不可分にむすびついている。ロシア社会民主党内の革命的潮流としてのボリシェヴィズムは、前者にたいしても後者にたいしても、一様に一線を画しなければならない。

しかし、この「一線を画する」という言葉を、われわれはどういう意味に解しているか、また会議はどういう意味に解したか？　反対派の若干の代表者たちがわれわれに信じこませたがっているように、会議が**ボリシェヴィキ派の分裂**を宣言したということを確証するような、資料がなにかあるだろうか？　そんな資料はない。会議は、その諸決議によってつぎのように声明した。ボリシェヴィキ派のうちに、ボリシェヴィズムとその明確な戦術的特色とに矛盾する諸潮流が現れている、と。わが国では、ボリシェヴィズムは、党のボリシェヴィキ派によって代表されている。だが、分派は党ではない。党は、たくさんのさまざまな色合いをふくむことができるし、それらの色合いのうちの極端なものは相互にするどく矛盾することさえありうる。ドイツの党内には、カウツキーのはっきりした革命的な一翼とならんで、われわれはベルンシュタインの超修正主義的な一翼のあるのを見る。それは、分派ではない。党内における分派とは、なによりもまず、一定の方向をめざして党に影響をおよぼし、自分たちの原則をできるだけ純粋な形で党内で貫徹させる目的で結成された**同意見者**の一集団である。こういう目的のためには、ほんとうの**意見の一致**が必要である。ボリシェヴィキ派の内部摩擦の問題の真相をはっきりさせたいとおもう人は、だれでも、われわれが**党**の統一にたいして提出している要求とボリシェヴィキ**派**の統一にたいして提出している要求とのこの相違を理解しなければならない。**会議は、ボリシェヴィキ派の分裂を宣言などしはしなかった**。もし地方の活動家が、**召還主義的な気分をもった**労働者を組織から追いだせとか、まして、召還主義的分子がいるところでは組織をただちに割れとかいう呼びかけとして会議の決議を理解するなら、はなはだしい誤りに陥るであろう。われわれは地方の活動家に、こういう措置をとらないよう、もっともきっぱりと警告する。労働者**大衆**のあいだには、形のととのった、**独自の潮流**としての召還主義はない、独自の存在を主張し、どこまでも腹蔵なくかたろうとする召還派の試みは、宿命的に、サンジカリズムへ、無政府主義へ導く。サンジカリズムと無政府主義の潮流のいくらかで

も首尾一貫した支持者は、分派からも、党からも身をひいている。召還主義的な**気分をもった**、おそらく広範な**労働者のグループ**をもこの部隊にいれるのは、ばかげたことであろう。この種の召還主義は、主として、国会議員団の活動をよく知らないことから生じた産物である。**この種の**召還主義とたたかうもっとも適当な手段は、一方では、議員団の活動を労働者にひろく、十分に知らせることであり、他方では、議員団と交渉をもち、議員団に働きかける方法を労働者にあたえることである。ペテルブルグにおける召還主義的な気分をいちじるしくうちやぶるためには、たとえば、国会議員の同志たちとペテルブルグの労働者とのいくつかの座談会をひらいただけで十分であった。こうして、召還派との**組織的な分裂**を避けることに、すべての努力を傾けなければならない。召還主義と、またそれと親類関係にあるサンジカリズムとにたいして、いくらかでも根気づよく、首尾一貫した**思想**闘争をおこなえば、組織的分裂うんぬんのあらゆる取りざたはまもなくむだ話になろうし、最悪のばあいでも、召還派が個人的または集団的にボリシェヴィキ派と党から**離脱する**ことになろう。

第 15 巻 P418~419『『プロレタリー』拡大編集局会議』
新聞『プロレタリー』第 46 号付録、1909 年 7 月 3（16）日

コメント

党は、たくさんのさまざまな色合いをふくむことができるし、それらの色合いのうちの極端なものは相互にするどく矛盾することさえありうる。新しい事態が起こると必ず左右の意見が出る。意見の違いを顕在化させ、より強固な党を作ることが重要である。

党内分派について

……党内で意見をおなじくするものが、いっしょにあつまってグループをつくるということは、適法である。意見をおなじくするものが、基金をあつめ、一つの共同の宣伝・煽動上の企画をたてるということは、適法である。彼らがこの企画の形態として、当面の時機に、たとえば新聞ではなく「学校」をえらぼうとのぞむことは、適法である。彼らがそれを公式の党学校とみなすことは、それが党員によって設立されるものである以上は、また、党のどんな組織にせよ、この企画にたいして政治的、思想的責任を引きうける組織がたとえ一つでもある以上は、適法である。そこでは、万事はまったく適法てあり、もし……もしそこに二股行為がなかったなら、もし偽善がなかったなら、もし自分の党をあざむくようなことがなかったなら……万事はたいへんけっこうであったろう。

だが、もし諸君が公衆にむかって学校が党のものであることを強調して、すなわち学校の形式的適法性の問題にとどまって、学校の発起人や創立者の**名まえをあげない**なら、すなわち、わが党内の**新しい**分派の企画であるという、学校の思想的＝政治的傾向について沈黙しているなら、それは党をあざむくものではないだろうか？　『プロレタリー』編集

局には、この学校についての二通の「書類」がある（すでに一年以上も編集局とマクシーモフとの交渉は、「書類」と外交的覚え書によるほかはおこなわれていない）。第一の書類には、ぜんぜん署名がない。絶対にだれの署名もない。――ただ、啓蒙の効用と、学校とよばれる施設の啓蒙的意義についての単なる考察があるだけてある。第二の書類には、替玉が署名している。いま、同志マクシーモフは、出版物によって公衆のまえで「最初の在外党学校」をほめたたえながら、この学校の**分派的**性格については、あいかわらず**沈黙している**。

この偽善政策は党に害毒をおよぼしている。この「政策」を、われわれは暴露するであろう。学校の発起人ならびに創立者は、**実際には**、同志「エル」（学校についての報告をおこない、生徒たちの学校を組織し、いくつかの労働者サークルによって講師にえらばれた、全党でだれ知らぬもののないモスクワの召還派の指導者をこう呼ぶことにしよう）、マクシーモフ、ルナチャルスキー、リャードフ、アレクシンスキー、**等々**である。これらの同志のだれかれがとくにどういう役割を演じたのか、学校のいろいろな公式機関内に、すなわち学校の「評議会」や、学校の「執行委員会」や、学校の講師団、等々のなかに、彼らがどう配置されているのか、われわれは知らないし、また知ろうという興味もない。個々のばあいに、どんな「分派的でない」同志たちが、この一団を補充できるのか、われわれは知らない。こういうことはみな、ぜんぜん重要ではない。新しい分派の中心であるこの学校の**真の**思想的＝政治的傾向は、**ほかならぬ**前記の人々によって**規定されている**、マクシーモフがこのことを党にかくしているのは、偽善政策をとるものであると、われわれは主張する。党内に新しい分派的中心が発生したことが悪いのではない――われわれは、けっして、分派活動に反対する安っぽい俗うけのするわめき声で自分の小さな政治的な元手をつくることをはばからない人々の同類ではない。――反対に、もし独自の色合いがあるのなら、そういうものが、党内で独自に意見を表明できることは、けっこうなことである。悪いのは、党が欺瞞に乗ぜられ、労働者――いうまでもなく、彼らは、あらゆる啓蒙的企画に共鳴するし、同様にあらゆる**学校**に共鳴している――もまた欺瞞に乗ぜられることである。　　注）……は本文中の略、……は青山の略

第 16 巻 P40~41『召還主義と創神主義の支侍者の分派について』
『プロレタリー』第47～48号付録、1909年9月11（24）日

ポイント

党内に新しい分派的中心が発生したことが悪いのではない――われわれは、けっして、分派活動に反対する安っぽい俗うけのするわめき声で自分の小さな政治的な元手をつくることをはばからない人々の同類ではない。もし独自の色合いがあるのなら、そういうものが、党内で独自に意見を表明できることは、けっこうなことである。しかし、労働者を欺瞞し、党を欺瞞、それをかくして分派活動をすることは許されない。